

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### マレーシアの「ママック」

中島咲寧 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)



ロティチャナイとテタレ：クアラルンプールのママックにて筆者撮影

マレーシアに行ったことがある人なら、「ママック (Mamak)」という言葉になじみのある人も多いだろう。ママックとは通常、インド系のイスラム教徒 (ムスリム) が営む食堂のことを指す。

比較的安価で飲食ができ、朝早くから夜遅くまで営業しており、かつハラル (イスラム教の戒律で許されたもの) の食事を提供する

ママックは、老若男女や民族、宗教の別を問わず、マレーシア国民全員が家族や友人とのおしゃべりを楽しむ空間として愛されている。他方、ママックという語は、インド系ムスリム集団そのものを指す意味合いもある。( 世代によって異なるが、蔑称と考える人もいるため、言葉の使用には注意が必要である )

本稿では、他の民族集団に比べてあまり語られることのない当集団の歴史を、その食文化との関連の中でひもといてみたい。

初期のインド系ムスリムによるマレー半島への流入は、15 世紀ごろのマラッカ王国の時代にまでさかのぼる。彼らは主にインド亜大陸の東側にあたるコロマンデル海岸から、ベンガル湾を渡って交易を行ったタミル系のムスリム商人たちであり、その中には商売の腕を買われて王宮専属の商人として重用された者もいると言われている。

マラッカが陥落した後はアチェやリアウ (現在はインドネシア領) などの港を拠点に活動し、1786 年にペナンが開港すると、華人商人などの他集団に先駆けてその多くがペナンに拠点を移した。後に港の周辺で商売を営む者が増え始めると、定住化した人口の増加とともに居住区が形成された。よって現在も国内におけるインド系ムスリム人口の多くはペナンに居住しており、他の地域に居住する場合でも世代をさかのぼるとペナン出身である場合が多い。

現在われわれがママックで楽しめる料理の多くは、こうして形成されたペナンのインド系ムスリム社会の

なかで生まれ、やがて全国へ広まっていったものである。一方、ここでいくつかの定番メニューのルーツに着目すると、当時のペナンには上述したタミル系の商人集団以外に、多様な背景を持つインド系ムスリム移民が存在していたことがわかる。

例えば、ママックの定番、かつ既にマレーシア料理の定番でもあるロティチャナイ (Roti Canai、薄焼きパン) やテタレ (Teh Tarik、ミルクティー) は、当時流刑地であったペナンに罪人として流入し、後に解放された、インド亜大陸西側のマラバール海岸地域を出身とするマラバリ (Malabar)・ムスリムたちが売り始めたのが最初であるとされている。

また、ナシカンダル (Nasi Kandar、白米にカレーなどインド系のおかずを盛り付けたもの) は、昔はインド系ムスリムの男性がカンダーと呼ばれるてんびん棒の両端にそれぞれ白米とカレーの入った鍋をつり、肩に担いで売り歩いていたことが名前の由来とされるが、そのスパイスの調合は、19 世紀後半に生じた深刻な飢饉 (ききん) を理由にペナンに集団移住してきた南インド内陸部のカダヤナルール (Kadayana Ilur) 村、テンカシ (Tenkasi) 村出身のムスリム女性たちによって担われてきたとされている。

ここから分かる通り、ママックの定番メニューの数々は、さまざまな理由でペナンに移動してきたインド系ムスリムたちの存在を背景に生み出され、当地域に根付いてきた。現在、多くのママックでインド出身の労働者が従業員として雇われ、彼らの手によってロティチャナイやナシカンダルなどの定番メニューが提供されていることを思うと、ママックの味が多様な背景を持つ人々によって守られている状況は、今に続くものといえるのかもしれない。

#### < 筆者紹介 >

1998 年生まれ。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、一貫制博士課程在籍中。同志社大学グローバル地域文化学部卒業。マレーシア在住のインド系 (タミル系) ムスリム社会を対象に、彼らが南インドとの間で維持する社会的つながりに着目して研究を進めている。主要論文に、「マレー人とは誰か 境界に立つインド系ムスリム住民の視点から」『アジア・アフリカ地域研究』23(2) 2024 年 (印刷中) がある。